

マイケル・ブース 著
『英国一家、日本を食べる』
(亜紀書房)「383 B2 I」

この本は自分が高校生の時には、おそらく手に取らなかったと思います。外で外食することもなく、家の食事は高齢の祖母に合わせた減塩薄味の健康食だったので、食に対してさほど興味がありませんでした。しかし大人になり、人生経験豊かな先輩方に食事に連れていってもらう機会が増え、世の中にはこんなに美味しいものがあるのか！と開眼しました。豊橋市山奥で食べた皮がパリッと香ばしく中がふわっと柔らかい鰻重、大阪福島のニンニク入りチーズドレッシングがかかった色とりどりの温野菜、五臓六腑に染み渡る奥深い汁……どれも思い出すだけで唾液腺が爆発しそうです。昔、銀座の母に「手相に食の意地の線が出ている」と言われたのも分かります。

この本は、日本料理なんて見た目ばかりで味気ないと思っていたイギリス人筆者が、辻静雄(辻調グループの創始者)の料理本をきっかけに、日本を食べ

歩きした記録です。季節の食材を最大限美味しく調理する技術への賛辞は読んでいて嬉しくなるし(自分が作ったわけではなく……)、「味噌はビーナッツのように濃厚でおいしいが、一方で下水管のようなすえたにおいがある」という日本に住む自分からは到底生まれないだろう感性が新鮮で、色んな意味で楽しめた一冊でした。本の最後に登場する銀座の究極の料理店。客は月謝袋に毎月決められた金額を入れて支払いをし、店が定めた年間予約に従って来店するという何ともプレミア感たっぷりのお店。行ってみよう。

夏目漱石 著
『坊っちゃん』
(岩波文庫)「081-7-10-3」

『坊っちゃん』の新聞連載から今年でちょうど100年。『坊っちゃん』の雑誌掲載はその8年前。『吾輩は猫である』ならさらに前だ。正直、漱石ならどれを読むのもよいと思っているけれど、量と質、読みやすさと歯ごたえのバランスの良さでは『坊っちゃん』が断然というのが私見である。何れにせよ、名作に

は作者という個人と同時に、その人が生きた社会が語られている。「社会」の方に焦点を当て、(教育)社会学の視点から改めてこの小説を読んだら、何が見えてくるだろうか。

我が坊っちゃんは、四国で中学の教師になる以前「物理学校(東京理科大学の前身)」で3年間勉強した。「前を通り掛つた生徒募集の広告が出て居たから何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学の手続をして」いるから、入学試験は受けていない。分類上、物理学校は【専門技芸学校】であり、坊っちゃんが中学校を卒業(物理学校へ入学)したと考えられるのは明治35(1902)年である。同年の中学卒業生は日本全体で6556名、うち高等学校へは12.9%、専門技芸学校へは26.2%が入学した。明治30年代は、概ね高等学校入学者の割合が減るに連れて専門技芸学校入学者が増えるという関係にあるから、高校に進学できなかった中学卒業生は相当数が専門学校へ流れたものと推測できる。ただし、同世代中の男子のうち高等学校に在学した者の率は明治41年で0.29%

読書案内

名越康文 著
『心がフツと軽くなる「瞬間の心理学」』
(角川新書)

だった。「学問は生来どれもこれも好きではない」という坊っちゃんだが、状況から考えれば、それなりのエリート(?)とは言えよう。

昨年、保健の授業の時に少しだけストレスマネジメントについて話させてもらいました。その時に、ストレスは自分の考え方や感じ方が影響することから、自分のおかれた環境や状況を変えることができなくても、自分の考え方や感じ方を変えることでストレスに対処できることを話しました。と言っても、ストレスにより辛いと感じているときに、冷静に「今の自分の考え方がよくないからストレスが溜まるんだ。だから、考え方を換えよう!」と思うのはなかなか簡単なことではありません。友だちや家族に話して、「こう考えてみたらいいよ」と言われても素直に受け入れられないときもあるでしょう。そんな時こそ、本でも読んで今の自分から少し離れて考えることが有効

だと思っています。

この本の中では現代人を「過去の後悔を掘り起こし、未来の不安を数え始め、『今、ここ』で起こっていないことをどんどん想像して、怒りや不安をどんどん膨らませている」「心を車に例えると、ブレーキを踏みながらアクセルを踏んでいる状態」と表現されていますが、みなさんの中にも当てはまる人はいるのではないのでしょうか。今の状況を簡単には変えられなくても、「心をフツと軽くしたいな」と思う人はぜひ読んでみて下さい。



永井路子 著
『美貌の女帝』

(文春文庫)

高校生のころ、歴史が苦手でした。丸暗記した年号と出来事が、頭の中でごちゃごちゃになつて何がなんだか……。歴史の先生曰く、「数学や英語に向ける勉強時間をちょっとだけ回せば、歴史が得意になります

よ！」そのとおりだと思いつつも、実際にはそうしなかったの
で、ずっと苦手なままでした。
大学生になって、あるとき、
書店でこの本を見つけました。
主人公である「美貌の女帝」
とは元正帝(氷高皇女)のこと。
父は天武天皇と持統天皇の子の
草壁皇子、母は天地天皇の娘の
阿閉皇女(元明帝)。物語は氷
高が14歳のときから始まりま
す。すでに父の草壁は亡く、祖
母の持統帝が草壁の子
の軽皇子(氷高の弟)
の成長を待っているとい
う情勢。やがて文武
天皇(軽皇子)が即位
するのですが、25歳の
若さで亡くなるところ
から蘇我系の女性たち
と藤原氏の対立が起こ
り、話が展開していきます。
読み進むうちに、壮大な歴史
の物語にどつぷりと漬かって、
飛鳥時代にタイムスリップした
かのような気分でした。
その後、同じ時代を描いた、
杉本苑子著「穢土莊嚴」など色
々読みましたが、歴史は生身の
人間の話なんだと改めて気付か
された思いでした。
皆さんも、何でもいいから肩
の凝らないものを読んでみてく
ださい。日常の雑多な出来事を

読書案内

忘れて何かに没頭するのもいい
ものですよ。

① 赤瀬川源平 著
『新解さんの謎』

(文藝春秋) [914 A2 3]

② 佐々木健一 著

『辞書になった男 ケンボー先
生と山田先生』

(文藝春秋) [813 S15 1]

自分の手元に赤い表紙の小型
国語辞典がある。二十年以上使
っているので表紙の文字は擦り
切れているが、『三省堂新明解
国語辞典 第四版』とかすかに
読める。仕事の為に使うことが
多いが、時折あてもなく「読ん
で」いる。【学校】の用例「い
やいや——に通う。」「苦学し
て——を終える。」「トコロテ
ン式に——を出す。」「ハスキ
ー」の語釈「声がしやがれてい
て、よくひびかない様子。(魅
力的と感じる向きも有る)」。『
挙げたらきりがないのでやめる
が、独特の語釈や用例の面白さ
・不思議さ。「調べる」よりも
「読む」が良い。この版が出
た当時、マスコミで話題になっ
た(ある方面からは批判もあっ

た)。この辞典の不思議さを感じ
たある編集者がある作家(純
文学作家としての名は尾辻克
彦)に依頼してこの辞典につい
ての文章を書いてもらうことにな
った。あまりにも個性的なこ
の辞典には人格が与えられ、「新
解さん」と名付けられた。「新
解さん」の個性や不思議さは①
で味わってもらいたいが、その
中の【時点】の用例「一月九日
の——では、その事実は判明し
ていなかった。」には作家も「何
か私小説を感じる」と述べてい
る。何で「一月九日」?

三省堂の小型国語辞典は二種
類ある。前述の「新解さん」と
『三省堂国語辞典』。前者は山
田忠雄、後者は見坊豪紀が編集。
この二人は大学の同期であり、
当初は共に一冊の辞書を作って
いた。やがて二人は分かれ別々
の辞書を作ることになった。②
は二人と二つの辞書の歴史が語
られるが、一方で「新解さんの
謎」が解き明かされてゆく。そ
の鍵は「一月九日」。二人はな
ぜ分かれることになったか。そ
れぞれが辞書にどんな思いを込
めて編集にあたったか。まるで
ミステリー小説を読むようだ。
ちなみに、「新解さん」五版
以降は個性が薄れていく。理由
は山田先生が亡くなったから。

"The Odyssey" by Homer.

For some life is about adventure, traveling to new places, experiencing new things and facing new challenges. The Odyssey has been the inspiration for many people to follow this path in life. Indeed, for many scholars it is one of the foundations of western culture. This was quite remarkable for me as the style of writing used in this epic work was quite unlike anything I had read before. Western culture is endowed with references to and concepts from this work, it has even touched Asian countries through modern adaptations like Ulysses 31 (Uchu Densetsu Yurishizu Satiwan), literally. Space Legend Ulysses 31, which was one of my favourite animes as a child.. Reading the bizarre sentences of this book, one's mind is struck open as the unfamiliar describes the familiar and you are left trying to understand the meaning behind something which seen through modern eyes is apparently meaningless. As a young man this book set alight my curiosity, my imagination and my desire to travel and learn about and from other cultures which ultimately lead to me living here in Japan.

ホメロス著『オデュッセイア』 (岩波文庫) [081 / II-8 / 102-4~5]

ある人にとって人生は冒険であり、新天地への旅であり、目新しいものの経験であり、新たな困難との対峙である。本作はこの人生の道を行く者に刺激を与えてきた。多くの学者がこの作品を西洋文化の礎の一つとみなしている。この壮大な作品は、多くの読んできたものと文体がまったく異なっていて、目を引くものがあつた。本作は西洋文化において幾度となく取り上げられては構想を与え、アジア諸国にまで、「宇宙伝説ユリシーズ 31」のような現代的翻案を通じて影響を与えているのである。(ちなみに宇宙伝説ユリシーズ 31 は子どもの時分のお気に入りのアニメである。) 本作の風変わりな文章を読むとただただ衝撃を受ける。馴染みのないものによってよく知ったことがらを描き出され、現代の視点からは明らかに無意味なものの意味をつかもうとするしかないのだ。若い時、本作が私の好奇心と想像力と異文化を旅し学びたいという野望を刺激し、私はここ日本に住むにいたるのだ。